

錦織圭と久保建英を観る

9月27日のテニス全仏オープン1回戦に錦織圭が登場し、夜にはヴィジャレアルの久保建英が対バルセロナ戦に登場した。以下は率直な観戦記である。

凡戦の1回戦

ニュースでは「4時間近い死闘を制す」と大げさに表現しているものもあったが、内容は凡戦である。全体として練習不足の感が否めない簡単なミスが、ゲームを長引かせただけである。

第1セットを1-6と簡単に奪われ、そのまま負けるかと思いきや、第2セットは逆に6-1で取るという大味な展開となった。第3セットも錦織ペースで、5-1となったところでこの試合の行方は決まったと思った瞬間から、サーブミスゲームを立て続けに落として、6-6にまで追い上げられタイブレークに持ち込まれた。最悪の展開である。何とかタイブレークをものにして、セットカウントを2-1にしたが、この無駄に長引いた第3セットの疲れが出て、第4セットはこれまた1-6で簡単に奪われた。

ゲームとして面白かったのは最終第5セットだけだ。ここでも、相手のサーブミスゲームをブレイクし、3-0とリードしたにもかかわらず、ミスとサーブミスゲームがでずに4-4にされた。なんとも締まらない、歯がゆい展開である。次のサーブミスゲームをキープして5-4となり、エヴァンスのサーブミスゲームを破って、辛うじて6-4で試合を終えた。ここでブレイクしないと、全仏では2ゲーム差がつくまで延々と試合が続くから、サーブミスゲームで終わるラッキーな結末。これで3時間50分の試合が終わった。

本来の力から程遠いのが錦織の現状である。コロナ休止の期間にどのようなトレーニングを積んできたのか疑問が湧く。今年からコーチになったミルニイの存在が薄いも気になった。

ネットを検索すると、コロナ休止期間は日本で1年かけてサーブフォームの改造に取り組んだとある。日本テニス協会男子日本代表担当の高田充コーチの指導を受け、怪我を避けるフォームの習得に取り組んだと。トレーニング課題が間違っていないか。なぜ本来のコーチから離れ、日本人コーチの指導を受けているのだろうか。しかも、サーブフォームに特化したトレーニングとはきわめて不可解だ。サーブの特訓を行うにしても、錦織に必要なのはサーブスピードを1割上げるトレーニングであるはずだが、専属でもない高田コーチからフォーム改造のアドバイスをもらうのは無駄ではないか。しかも、この試合を見る限り、トレーニングの成果をどこにも見つけることができなかった。

対エヴァンス戦の錦織のファーストサーブの平均速度は100マイル/h(166km/h)、セカンドサーブは75マイル/h(125km/h)である。この速度は大坂なおみのそれより遅く、当日の事例で言えば、コンタと戦った16歳の天才少女ガウフのサーブ速度とほぼ同じ

である。ちなみに、英国籍のコンタは両親がハンガリー人で、オーストラリアに生まれ、その後英国に移住した。

錦織がサーヴィスキープに汲々とし、試合時間が長引くのは、サーヴィスに威力がないからだ。あと 1 割ほどスピードが上がれば、試合時間を縮めて、肘への負担を軽くできるはずである。ところが、錦織はそうのように考えないようだ。それを指摘するコーチもいないようだ。フォーム改造に使う時間があれば、サーブスピードの強化に当てるべきだ。ナダルもジョコヴィッチも、20 代後半からそうやってサーヴィスの威力を高める努力をしてきた。それにたいして、錦織はまったく無策のままここ 4-5 年過ごしてきた。

錦織のサーヴィス速度は、2014 年の全米オープンで準優勝した時から、まったく変わっていない。だから、ナダルやジョコヴィッチの差は縮まるどころか、広がるばかりである。彼らとのサーブスピードの差は、ファースト、セカンドともで 25~30km/h である。この差はトップ選手として致命的である。しかし、チャン・コーチも、ボッティーニ・コーチもこれを強化ポイントに定めていたとは思われない。2014 年以降の飛躍時に、適切なコーチングを得られなかった（得ようとしなかった）ことが、現在の低迷を招いている。最初からサーブスピードを上げることはできないという先入観から抜け出すことなく、だから世界の名匠に教を請うのではなく、日本に戻ってファーム改造の指導を受けるのは、とても世界のトッププロのやり方だとは思えない。

対エヴァンス戦で分かったことは、錦織のサーブに何の進歩もないという事実である。もっとも、本人がこの弱点の克服に全力を尽くすという気持ちがない限り、サーブの威力向上に特化したコーチを招くこともないだろうし、今さら肩を強くしようとも思わないだろうから、錦織時代は終わったと考えるべきだろう。

大坂なおみと比較すると、錦織がコーチに求めるものが異なっている。大坂は自分の弱点を見つけ、それを徹底して修正してくれるコーチを求めている。その貪欲な姿勢が、コーチの頻繁な交代となっている。強くなりたいという闘争心が、チーム大坂の形成を支えている。チーム圭はそういう厳しさに欠けてはいないだろうか。常時トーナメントに帯同するコーチが不在というのも、トップ選手の意識が問われる。全仏には日本人コーチが付いているようだが、サーヴィスフォームに特化したコーチングなど不要である。まさにコーチがいてもいなくても構わないという状況こそ、チーム圭の最大の弱点である。

バルサ時代の終焉

サッカー欧州チャンピオンズリーグ（CL）は世界最高峰のクラブチャンピオンシップである。今年の優勝者バイエルン・ミュンヘンは予選リーグから本戦トーナメントを無傷で闘い、優勝した。とくに 8 月の準々決勝対バルセロナ戦は 8-2 という圧倒的な大差で勝利したが、それがバルサのチーム解体を促すことになった。

試合開始から前線の選手が猛烈なプレスを仕掛けるバイエルンの攻撃に、バルセロナのパスサッカーは粉碎された。現代のサッカーは最初から最後まで、プレスをかけ続けるこ

とができるチームが優位に立つ。ところが、バルサのサッカーは最終的にメッシにボールを収めるパスサッカーを信条とする。メッシはプレスをかける仕事から免除され、同じくスアレスもまた、プレスの仕事は手抜きが許されていた。バイエルンミュンヘン戦の大敗を受けて、やり玉に挙げたのはセティエン監督だけでない。メッシとスアレスに二大スターが批判の俎上に載せられた。走らない FW は不要という厳しい批判である。彼ら二人への批判に連動して、ラキティッチやビダルもやり玉に上がった。全盛期を過ぎた選手たちの手抜きが、バルセロナの停滞を招いているという批判である。

最終的に、新監督クーマンの意向にしたがって、メッシはバルサに残るが、スアレスは A.マドリード、ラキティッチはセビージャへ移籍し、ビダルはインテルに移籍となった。ベテランが抜けた後に、若手が入る込むチャンスが生まれた。27 日の試合は新生バルセロナの今後を占う重要なゲームになった。

他方、久保建英だが、昨シーズンは所属先のレアルマドリードからマヨルカにレンタルされた。レギュラーが見込めるチームでの武者修行である。しかし、コロナ休止前の久保にはレギュラーが確約されず、途中出場が繰り返されただけだった。しかも、彼が入る右サイド（2列目右のインサイドハーフ）にはボールが来ず、マヨルカの攻撃は左サイド1本やりだった。マヨルカの選手のレベルは全体的に低いが、しかし新参者を引き立てるほどお人好しではない。プロである以上、まず自分が目立つことを最優先する。1年契約の腰掛けで来ている久保が目立ったのでは、自分たちの立場がない。他方、久保もしたたかで、右サイドでボールを待つのではなく、ポジションを変えて、中央に切り込む形でゴールに迫っていた。只者ではない動きを見せていた。

チーム内の力関係に大きな変化が生まれたのは、リーグ再開後である。久保の能力を確信した監督がレギュラーに抜擢し、同僚たちも一目置くようになった。2部降格が現実味を帯びる中で、久保にボールを預ければチャンスが広がることが分かったのだ。ここから久保は18歳にして、ラ・リーガ1部チームの牽引役になり、2部降格を阻止するために、チームメイトと共闘するようになった。弱小クラブとはいえ、ラ・リーガ1部のクラブである。レアルマドリードともバルセロナとも戦う機会もある。そこで見せたペナルティエリア内の球捌きは、唸らせるものがあった。だから、マヨルカの2部降格が決まると同時に、久保のレンタルを希望するクラブが続出した。レアルマドリードも、すぐにはレギュラーとして使えない久保を、適切なクラブへレンタルすることで、久保に付加価値を付けることができる。

レアルが設定した久保のレンタル先の条件は、CL あるいは EL（欧州リーグ）に参加する資格をもつチームで、久保をレギュラーとして扱えることである。ただし、売却オプションは付けない。あくまでレンタルというスタンスである。つまり、レアルは久保を手放さないということだ。パリサンジェルマンやバイエルンミュンヘンからも声がかかったが、スペイン語を自由に操れる久保が、スペイン語圏外に行くことは考えられない。最終的、ヴィジャレアルに移籍先が決った。

ヴィジャレアルはここまで3試合を終えたが、久保はすべて終盤の10数分間の出場に留まっている。

岡崎が所属する初戦の対ウエスカ戦では、岡崎がフル出場したのにたいし、久保は終了13分前の77分からの途中出場。乾が所属する対エイバル戦では乾がフル出場したのに、久保は終了5分前の85分からの出場。そして、対バルセロナ戦は74分からロスタイムを含めておよそ20分の出場となった。久保の控え扱いについて、レアルからヴィジャレアルに問い合わせの電話が行っているようだが、久保の扱いは昨シーズンのマヨルカデビュー当時と同じである。

他方、久保はここまで短時間の出場でも、それなりのパフォーマンスを見せている。ふつう、消化時間のような残り時間でインパクトを残すのは難しい。しかし、日曜日の対バルサ戦では、久保が入って間もなく、右サイドの攻撃が活性化した。久保が何度もペナルティエリア内に入り、2度も中央への折り返しを披露しただけでなく、切れ込んでシュートにまで持ち込むシーンもあった。75分間、これといったインパクトがなかった右サイドからの攻撃が、久保が入った途端に活性化したのだ。まさに「違いを出せる」とはこういうことである。感心するのは、久保には臆するという態度がないことだ。小柄な久保がピッチで実に堂々とプレーしている。状況判断が早く、自分で持ち込む場面とパスを選択する場面を冷静に判断している。相手がレアルだろうとバルサだろうと、自分の局面打開能力に自信を持っている。こういう日本人選手はいままで欧州リーグにはいなかった。バルサの下部組織で育った自信と能力が、自然と態度に現れている。

しかし、ここでもレンタルという制限が引っ掛かる。ヴィジャレアルの右サイドハーフを担っているのは生え抜きのチュクウェゼ（ナイジェリア）である。監督にすれば、1年でチームを去る久保よりは、チュクウェゼを重用したいのは当然である。あるいは、マネージメントの方が、その指示をだしているのかもしれない。しかし、短時間でもこれだけチャンスメイクができる久保を、試合終盤までベンチに置く選択肢はあり得ない。いずれ、スタメン起用の日が来るだろう。

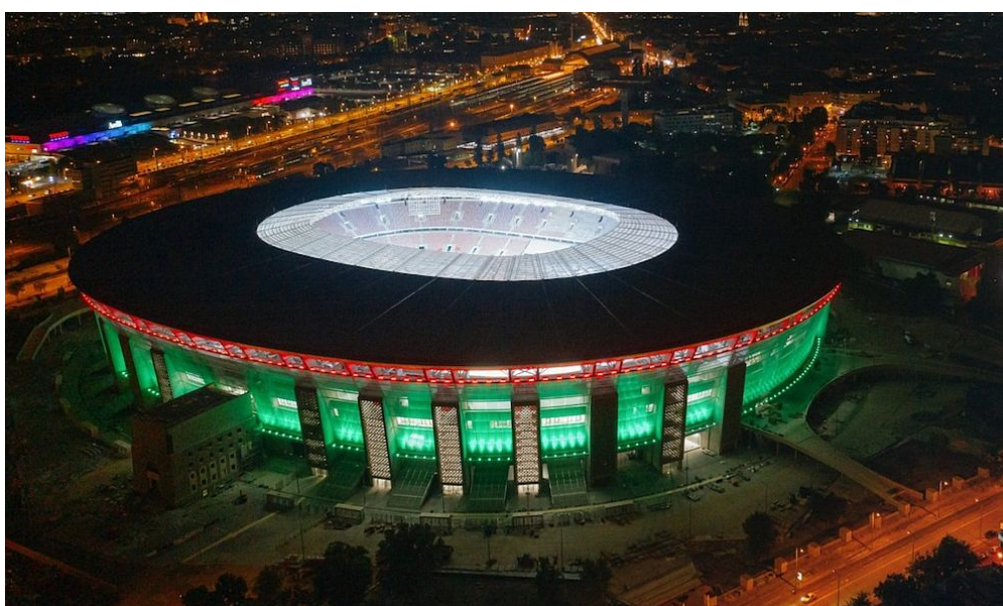
対するバルセロナは、下部組織で久保と一緒に育ったファティが2得点の衝撃デビューを披露した。まだ17歳である。バルサのチーム一新を象徴するようなデビューである。世界には天才的なアスリートが次から次へと登場する。出場時間は限られているが、「タケ」あるいは「タケクボ」の名前は、すでにラ・リーガで知らない人はいない。久保を含めて、新時代の担う若い選手に注目だ。

UEFA スーパーカップ

今年のUEFA スーパーカップ（CL優勝チームとEL優勝チームの対戦）が9月24日、ブダペストのプシュカシュ・アリーナで開催された。いわば欧州クラブトーナメント1部の優勝チームと敗者復活戦の優勝チームとの対戦である。CL優勝チームのバイエルンミュンヘンが、EL優勝チームセビージャを迎え撃った戦いである。結果は、延長104分に決勝ゴ

ールを決めたバイエルンが勝利したが、思いのほかバイエルンはてこずった。セビージャの健闘を讃えるべきか。

興味深かったのは主催に至る背景である。レアルマドリードの伝説的 FW プシュカシュは 1950 年代のハンガリーサッカー黄金時代の主役である。1956 年の動乱時に国外遠征で、最終的にハンガリーに戻らず、スペインに渡り、レアルマドリードの一時代を築いた選手である。そのプシュカシュを記念する「FIFA プシュカシュ賞」が 2009 年に制定され、もっとも美しいゴールゲッターに贈られることになった。ハンガリー政府は国立競技場をサッカー場に改修し、これを「プシュカシュ・アリーナ」と命名したのである。2019 年末に完成した。



プシュカシュ・アリーナ

今年の UEFA スーパーカップは、このプシュカシュ・スタジアムの「こけら落とし」とも呼べる一大イベントである。ところが、コロナ禍でスーパーカップの開催が危うくなった。しかし、サッカー狂で知られるオルバン首相である。これを開催するために、あらゆる手が打たれた。

9月1日より、観光客のハンガリー入国は禁止されているが、この試合開催のために、特例措置が導入された。政府が重要と認める行事への参加については、一定の条件の下で入国を許可するというものである。

スーパーカップを観戦する両チームのファンに 3000 枚ずつチケットが保証され、ハンガリー到着 72 時間以内の PCR 検査陰性結果を提示できる者の入国が許可された。入国の際の体温検査を経て、集団でバス移動することが義務づけられた。アリーナへ入場できる人数は収容能力の 3 割、20,000 名と設定され、両チーム応援団 6,000 枚以外のチケットは国内販

売された。

こうして、コロナ禍の最中、20,000名規模の観衆が入ったサッカー試合が挙行された。サッカーなら良いのかというご都合主義を批判する向きもあったが、とにかく今年最大の行事が終わった。ハンガリーではサッカー欧州選手権招致のために、サッカー・スタジアムの建設が相次いでいる。病院や学校の新設にお金を回してくれば良いものを、という恨み節は絶えない。